

北窓時男著

『地域漁業の社会と生態』

——海域東南アジアの漁民像を求めて——』

コモンズ 2000年 318ページ

あき みち とも ちか
秋 道 智 彌

I 歩く・見る・聞く

東西5000キロメートルにわたって展開する大小の島嶼群と、マラッカ海峡からジャワ海、スラウェシ海、マルク海、アラフラ海に至る海域が、海の研究にとって宝庫であることは多くの研究者が認めるところである。本書の著者である北窓時男氏は、こうした点にも関わらず、漁業研究の蓄積は他の分野にくらべてすくないこと、地域における漁業を総合的に捉える上での学際的な研究があまりなかったことを指摘している。

本書は著者による6年間のインドネシア滞在とその後の数次にわたる現地調査を踏まえて書かれたものである。内容が長期のフィールド・ワークに基づいた実証性に富むものであることは、読み進むうちに自然と納得がいく。それぞれの地域を「歩く・見る・聞く」なかで著者が体験し、感動した記録が如実に示されているからである。もちろん、広いインドネシアを隈なく知ることは至難の技といわなければならないが、著者は海域世界を丹念に歩いて資料をあつめた。その努力にたいして敬意を表したい。

本書の標題にある地域漁業とはいったい何だろう。漁業は一般に海の生態の影響を大きく受ける。だから地域なりローカルな条件との相関は明瞭に見いださうだろう。しかし、自然生態系の条件だけで漁業が成立するわけではかならずしもない。歴史的な背景や地域に蓄積されてきた文化や社会の条件によっても、漁業の種類や規模・内容が規定される。こうして、地域における漁業が自然の生態と歴史・

社会・文化などの諸条件により成立することになる。さらに地域ごとに醸成された漁業は、そこに住む人びとの生活世界のなかに組み込まれて地域の風土を形成する。それと同時に、地域は閉鎖的な系をなすのではなく、外部世界とネットワークを通じて結ばれている。そのことが地域漁業自体の動的な性格を産み出すことになる。

以上のような見取り図で、著者は東南アジアの海域世界における地域漁業を捉えようとした。そのねらいは、(1)地球環境問題で顕在化した大量消費と経済至上主義への反省と、現代日本の閉塞状況を脱却するためのモデルとして、地域の重要性を模索することと、(2)移動と分散を特徴とするネットワーク型社会から構成される地域の生活世界のもつ意義を指摘することにある。

対象としたフィールドはインドネシアの各地域における漁村であり、そこで海との多様なかわりをもつ人びとが本書の主演となっている。

II 構成

本書の構成は、以下のようになっている。

第I章 地域漁業の時間と空間

第II章 漁民の集合と分散

第III章 漁業技術の蓄積と変容

第IV章 漁村と地域の形成

第V章 漁業の伝播と適応

第VI章 圏的地域とネットワーク世界

いくつかの章は、単著論文として既発表あるいは地域漁業学会において口頭で発表されたものが骨子となっている。そのために、詳細な事例研究を連ね、1冊の書としてまとめる上でどのような論理と組立てがなされるのかについて、私自身もたいへん興味をもった。

論文なり著作には、著者の主張や分析概念を表すキーワードがかならずある。本書の構成と各章の冒頭にある要約や索引から、そのいくつかを挙げてみよう。移動分散型社会、対人主義、ネットワーク、技術蓄積、外来と在来(地)、圏的地域、階段の踊り

場、時間と空間などがキーワードといえる。

これらの諸概念や用語を分析の手がかりとするにあたり、著者は、鶴見良行、前田成文、玉野井芳郎、中村尚司、坪内良博各氏らの論考に依拠している。注意すべきは、とりあげられた分析概念自体は、漁業だけにとどまらず農業や林業、商業など、生産物とその流通、消費を考察する研究においても十分に適用できる性質のものであることだ。東南アジアの海域世界では、林産物、農産物、さらには織物や土器、その他の手工業製品などがさまざまなネットワークと対人関係を通じて行き交う。とすれば、本研究のなかでことさらに海や漁業を対象とした著者の主張における「落とし所」はどのへんにあるといえるのだろうか。以下に、いくつかの問題点をとりあげてみることにしたい。

III 漁業技術と流通

本書が主要な対象としている漁業は、マルク海におけるカツオ一本釣り漁の事例（第II章の2と第IV章の2）のほかは、まき網、張網、敷網などの網漁である。内容が網漁にやや特化した点について、コメントが必要だろう。著者はもともと網漁具の専門であり、本書でもとくに第III章、第V章における漁網に関する詳細な記述がその片鱗を伺わせる。得意なテーマを追いかけたわけである。もちろん、インドネシアにとくに限られるわけではないが、国の漁業生産全体のなかで網漁は大きな比重を占めている。

インドネシアの場合、第2次大戦後に漁業はたいへん大きな変化を遂げてきた。著者が指摘するように、漁業生産や漁船数、漁法別の生産量を見ると以下のような特徴を指摘できる。すなわち、1975年から1996年の約30年間に(1)海面漁業の生産量が100万トンから338万トンに増加し、(2)漁船数も26万隻から40万隻以上に増加し、(3)動力船が1万5000隻から16万7000隻と急増した。また、(4)巾着網、リングネット、刺網、各種の釣りによる漁業生産が4～9倍に増加した反面、(5)敷網、張網、まき網による生産の伸びは緩慢で3倍どまりである。

この背景には、漁船の動力船化、合成繊維製漁網

の普及、輸出向け漁業生産の増加などがあつた。すなわち、漁具が大型化し、沖合における新規の漁場開発が可能となったので、生産量が増加した。反面、小規模な沿岸漁業や固定式の漁具による敷網、張網などによる漁業の沖合進出は果たされていない。さらに、1980年代以降、資源枯渇からジャワ海における底曳網漁は禁止され、東インドネシア方面へ漁場が拡大する要因となったことを指摘しておきたい。

網漁のうち、まき網、敷網などの漁獲対象は、ムロアジ、グルクマ、サッパ、インドアイノコイワシなど、プランクトン食の多獲性魚類である。一本釣りの対象となるカツオ、スマ、ヒラソウダ、マグロなどはそれらの小型魚を食べる魚食性の魚種である。いっぽう、張網や刺網、それに底曳網、地曳網などでは、多種多様な魚種が漁獲される。

第I章で取り上げられているインドネシアの漁具・漁法に関する分類は、スバニ氏の労作に依拠している〔Subani 1971〕。そのなかで著者は自ら入手した追加情報をふまえ、漁法の転換と変容をしめす例をいくつか提示している。漁業のすべてにわたって技術の伝播や転換、変化を明らかにすることは難しいことかもしれないが、私はこの部分の体系的な分析こそ、インドネシア漁業史研究に貢献する重要な業績になるのではないかと考える。

網の材料が天然素材から合成素材へと変化したという記述があるが、天然素材とは何なのか。どのようにして入手されるのか。また、網の浮きや沈子にはどのような素材のものが使われ、どのような変化が見られるのか、細かい記述が欲しいところである。たとえば、スラウェシ島北部に点在するサンギル諸島では、現在、沿岸の刺網漁に使うナイロン製網にマガキガイの沈子とゴムゾウリを切ったゴム片が浮きとして広く利用されている。周辺の島でおこなわれるキリンサイやオゴノリの海藻養殖では(注1)、海藻の種苗をとりつけたロープを水中に固定するための浮きとして空のペットボトルが利用される。貝製の沈子はおそらく古くから用いられてきた素材であるが、ゴムゾウリとペットボトルはいずれも現代の廃棄物であり、その歴史は古くにさかのぼるものではない。私は、両者が混在している現代の状況に興味

をもつ。

漁業技術の詳細な分析に比べて、漁獲物の分配や流通についてはそれほど詳しい分析はなされていない。インドネシアにおける漁業を流通面からみると、女性、平準化、仲買人と船主との貸借関係など、いくつかのキーワードが浮かびあがる。まき網や巾着網で多獲性のマルアジが漁獲される。それでは、底曳網や刺網、あるいは張網などによる多種類からなる漁獲物の場合、どのような流通システムが介在するのだろうか。著者はスマトラ島における張網漁業の例のなかで、漁獲物のうちエビがシンガポールへ輸出され、大型魚は塩干魚に、小型魚は塩辛ペースト(注2)にそれぞれ加工され、都市部へと出荷されると述べる。著者がこの問題をさらに広く取りあげられるかどうかという思いで本書をひもといたが、やや期待はずれにおわった。漁法ごとに流通システムが異なる場合と、漁獲物の種類やサイズ、季節により流通が多様化する場合を立体的に把握する視点が必要ではないか。

IV 世界観とネットワーク

東南アジアの海域世界に点在する多種多様な漁業を「圏」とかネットワークとして描こうとする試みは、これまで皆無であったわけではない。たとえば漁撈技術に注目した研究として、西村朝日太郎氏による漁文化—礁文化論、藪内彦彦氏による漁撈文化圏設定試論などがある。著者はその上にたち、インドネシアの海域世界において8つの地縁技術共有圏論を新しく提起している。本書のなかでもっともオリジナリティーがあるのは、やはりこの部分だろう。漁撈ではなく経済性の強い漁業に注目したこと、漁業の技術要因だけでなく社会経済的な要因を考慮した点は卓見である。地縁技術という新しい概念が提起されるのもこの部分である。

著者は地縁技術を分析するうえで、「技術蓄積」という分析概念を手がかりにした。漁業を規定する要因を自然環境、技術、社会経済の3つにわけ、とくに技術を構成する3つの形態を元に分析を試みた。それらは、海への蓄積、人間主体への蓄積、道具へ

の蓄積である。しかも技術蓄積が時代的に変化してきた点に注目し、技術自体の動態を明らかにしようとした。ただし、人間、海、技術への蓄積の度合いや多少を模式的にあらわす試みはあくまで概念的にすぎない。蓄積の内容とスケールの目盛りが3つの軸のあいだで同一ではない。蓄積の尺度自体が定性的であり、その意味を比較できない点が気になるのである。むしろ、単位漁獲努力量(CPUE: Catch Per Unit Effort)との関係や、技術蓄積と資源の枯渇・持続的利用との相関性について一般化して見る作業が必要ではなかったか。ともあれ、現場を踏まえたパラダイムの提示は新鮮であり、この種の類型化としてはまずまずとよいのではないか。

著者はネットワーク性の問題について、スマトラ島のバガンシアピアピアアラフラ海のアルー諸島における水産物流通の事例をとりあげている。そのなかにあるように、生産地から流通機構を介して消費者に至るチャンネルには、多くの人びとや民族集団が介在する。エスニシティを考慮した生産から消費に至る流通・取引関係をめぐる人間関係の連鎖を私はエスノ・ネットワークと呼んでいる[秋道1995]。

著者は、バガンシアピアピアの例でエスノ・ネットワークの実例を見事に示してくれた。漁民であるマレー人と、その漁民との二者間で漁獲物の売買や必要機材の提供や融資をおこなう頭家との関係、さらにその頭家から漁獲物を買う仲買人、輸出業者、輸入業者、消費地での仲卸人、小売り人、消費者にいたるまで、種々の民族集団が関与する。とくに中国向けの輸出品については、華人のネットワークが大きな役割を演じる。

最後に著者は技術の分析を踏まえた論として、漁民の世界観とネットワーク型社会の特性についてふれている。世界観は、環境認識や世界の構築のされ方についての理解のしかたであるとして、著者は鶴見良行氏の提唱した「踊り場」という概念に大きく依拠して論を展開している。踊り場は移動性と深く関わった世界の認識のしかたであると主張する。人間は新しい世界を探索するさいに、順応、迷い、飛躍への準備などを通じて新たな価値観の構築をおこ

なう。しかし鶴見氏自身も登山の例を挙げているように、踊り場と世界観の形成を、移動分散を繰り返す海域社会だけの問題として描いてよいわけではない。あらゆる旅や漂泊に、そして牧畜民や移動民、採集狩猟民についても十分に検証する必要があると思う。

東南アジアの海域世界が漁業研究の宝庫であると述べた。にもかかわらず、これまでとくに漁業技術を対象とした学際的な研究がなかった点で、本書は重要な意義をもつことはまちがいない。しかし、漁業技術に中心がおかれた論述のなかでは、流通の問題や資源管理の問題が十分な理論的な背景をもって取りあげられたとは言い難い。

じつは、ネットワーク性、集合分散性などの議論は漁業以外の面でもこれまでに指摘されている。このことを踏まえると、流通や資源管理の問題には、新たな理論的展開を可能にする材料が詰まっていると考えるがいかかなものであろうか。北窓氏が漁業技術論として秀逸な成果を成し遂げたことを評価し

つつ、東南アジア研究のなかで、海と人びととのさらなる多様な関係性を自前の問題として追求されつづけることを心から願いたい。

(注1) キリンサイやオゴノリなどの海藻に含まれるカラギーナン成分がのりとして利用される。インドネシアからはもっぱら欧米諸国に輸出される。

(注2) 塩辛ペーストは、小型魚を塩分とまぜてペースト状にした発酵食品で、インドネシアではトラシと呼ばれ調味料として多用される。

文献リスト

秋道智彌 1995. 『海洋民族学——海のナチュラルリストたち——』東京大学出版会。

Subani, W. 1971. *Alat dan Tjara Penangkapan Ikan di Indonesia Djilid I* [インドネシアの漁具漁法 I]. Lembaga Penelitian Perikanan Laut.

(国立民族学博物館民族文化研究部教授)